夢をかなえるゾウ0（ゼロ）

ガネーシャと夢を食べるバク

水野敬也

文響社

挿画　矢野信一郎
装丁　池田進吾（next door design）

「夢が、ない……やて？」

ゾウの頭を持ち、なぜか関西弁で話す神様、ガネーシャ（敬称略）は、アゴが外れるんじゃないかと心配になるくらい口を大きく開けて言った。

「す、すみません」

僕が恐縮して頭を下げると、ガネーシャはしばらくの間、驚いた表情のまま固まっていたが、突然、ぎゃははは！　と笑い出し、僕の肩をバンバンと叩いて言った。

「自分、めちゃめちゃおもろいやん！　ワシが巷で『夢をかなえるゾウ』て呼ばれてることを知ってて、あえて『夢がない』ちゅうパワーワードで度肝を抜いてきたわけやろ？　これ、『美容院に来たのに帽子取ったらスキンヘッドでした』みたいな構図やん！　自分、見た目は地味やけど中身は相当なお笑いモンスターやないか！」

そしてガネーシャは、もう一度、ぎゃははは！　と大声で笑ったが、僕の顔を見ているうちに、ははは……はは……と徐々に声を落とし、最後は真剣な表情になって言った。

「ほんまに、ないん？」

「はい」
「お金持ちになりたいとか、有名になりたいとか、他の人にできへんようなでっかい仕事がしたいとかは？」
「そういうのが、ないんです」
「でも、世界一周旅行はしてみたいやんな？」
「英語が話せないので……」
「女の子にモテモテになりたいとかは？」
「……すみません」
「なんでやねん！！！」
ガネーシャは、いら立ちをぶつけるように自分の膝を凄まじい勢いで叩いたが、ハッと何かに気づいた様子で言った。
「今はないて言うてるけど、昔はあったんちゃうか？　そんで大人になるにつれて昔の夢を忘れていったんや！　間違いなくそのパターンや！　自分、子どものころに『将来の夢』とか作文で書けへんかったか？」
「書きました」
「ほらきた！　で？　で？　何て書いたん？」

「『将来はお医者さんになりたい』と書いた覚えがあります。でも、それは本心ではなかったというか……両親や先生を喜ばせるために書いたんです」
「そ、そんな……」
ガネーシャは膝から崩れ落ち、床に両手をついてぶつぶつとつぶやいた。
「人が偉業を成し遂げるためには、ただの夢やのうてバクちゃんお墨付きの〝本物の夢〟が必要やのに……そもそもの夢がないやなんて、そんなん絶対育ちようがないやん……」
うなだれるガネーシャに向かって、僕は言った。
「ガネーシャ様……」
そして僕は、この三か月間で心の奥底に溜まっていた気持ちを吐き出した。
「夢って、必要なものでしょうか」
僕は続けた。
「『将来の夢は何？』と質問されて答えられない自分はダメな人間な気がしてしまうのですが、夢がなくても幸せそうに生きている人はいますし……」
「そういう哲学的な話はどうでもええねん！」
ガネーシャはそう叫んで立ち上がると、四本の手で僕の胸倉をつかんで揺らしな

がら言った。

「ええか？　ワシはなぁ、自分のとこに降臨する前、他の神々に対して『この、何の取り柄もない平凡な男を歴史に名を刻む偉人に育て上げたるから、カタツムリみたいに目ん玉突き出してよう見とけや！』て大見得切ってきてんねんで⁉　しかも、もし自分を偉人にできへんかったら、『神様の資格返上して普通のゾウに生まれ変わって、一生、名前にゾウがつくもんしか食べへんわ！』て言うてもうてんねん！　名前に『ゾウ』がつく食べ物て何や⁉　『雑煮』と『雑炊』くらいしかあれへんやろ！　自分のせいでゾウになってもうたワシは、毎日、熱々の『雑煮』と『雑炊』を食べながら……」

「ゴルゴンゾーラはどうですか？」

「おお！　三大ブルーチーズの中で最もマイルドやと称され、パスタやピッツァに重宝されるあのチーズも食べれんねや……ってそういう話とちゃうやろが！」

「す、すみません」僕があわてて頭を下げると、ガネーシャは、

「ああ、何でこんなことになってもうたんや……」

と再び頭を抱えたが、一縷の望みを見つけたように目をキラリと輝かせた。

「ちょっと、状況を整理してみよか。今、ワシの身に何が起きてるか正確に把握し

たら、この混乱が単なる勘違いやったって気づくかもしれへん」
「で、でも……」
「分かるで。確かに『状況を整理したら何か変わるかもしれへん』言うて、かれこれ十五回くらい整理させてるもんな。でも、これが最後や。ほんまに最後の最後やから自分の記憶、もう一ぺん死ぬ気でたどってみてや。ワシが自分と出会うたきっかけってどんなんやったっけ？」
　僕は小さくため息をつきながら、もう一度最初から説明を始めた。
「私がガネーシャ様と出会ったのは――――」

夢をかなえるゾウ0（ゼロ）

ガネーシャと夢を食べるバク

（今日こそは絶対に言うぞ。「会社を辞めます」って）

僕は、デスクの下で震える両足を手で必死に押さえつけながら自分に言い聞かせていた。

――三か月前。

この部署に新たに配属された課長の歓迎会が開かれたのだけど、会の冒頭で、課長はみんなにこんな質問を投げかけた。

「優秀な人間の特徴って何だと思う？」

日焼けして精悍な顔つきをした課長の左手首で、高級そうな腕時計が光を放っている。

今後の会社生活を左右する上司の質問に対して、同僚たちが口々に答え始めたが、課長は発言者の顔を見ずに片手でスマートフォンを操作し続けた。そして、あらかた意見が出そろったタイミングで顔を上げて言った。

「優秀な人間の特徴は、自分の夢にコミットしていることだ」

（コミット……）

普段の会話ではあまり聞かない横文字に戸惑ったが、課長はそのまま続けた。

「最近の若いやつは、酒を飲まない、ブランドものの服を着ない、車の免許も持ってないって聞くけどな。インセンティブは何でも良いんだよ。良い部屋に住みたい、社会的にインパクトの大きな仕事がしたい、グローバルに活躍したい……そういう夢があるかないか。そして、夢にどれだけ真剣にコミットできているかでパフォーマンスは全然違ってくるんだ」

（インセンティブってどういう意味だったっけ……）

頻出（ひんしゅつ）する横文字を必死に頭の中で追っていると、突然、課長の口調が変わった。

「『夢なき者は理想なし。理想なき者は信念なし。信念なき者は計画なし。計画なき者は実行なし。実行なき者は成果なし。成果なき者は幸福なし。ゆえに幸福を求むる者は夢なかるべからず』」

——何の話だろう？　同僚たちも戸惑っている様子だったが、課長が、

「日本資本主義の父、渋沢栄一の言葉だよ」

と言うと、「おお……」とため息を漏らした。僕も同じように反応する。
「じゃあ」
スマホをテーブルの上に置いた課長は両肘をつき、手を組んで言った。
「今日はアイスブレイクもかねて、みんなの夢を教えてもらおうかな」
僕は嫌な予感がして目をそらしたが――ヘビは逃げるために動き始めたカエルに襲いかかるという――「君の夢は？」と、最初に指名されてしまった。
「わ、私の夢は、今の仕事で会社の事業に貢献して……」
たどたどしい口調で答え始めると、課長は僕の言葉を途中でさえぎって言った。
「そういう建前じゃなくてさ、本音を言えよ」
口調に棘が含まれたのを感じ、全身に緊張が走る。ただ、「本音」と言われてもどう答えれば良いのか分からず口をつぐんでいると、課長はスマホを操作しながら言った。
「今日、君が会社でランチを食べてるの見たけど、遅いよね」
何を意図する話なのか分からなかったが、反射的に「す、すみません」と頭を下げると、課長は続けた。
「日本電産の永守会長は、入社試験で早く弁当を食べた学生から採用したくらいだ

から。もっと時間、大事にしようよ」

そして課長は、僕の返答を待たずに隣を指差して言った。

「じゃ、次」

指名された同僚は、緊張した面持ちで自分の夢を答え始めた。

でも、その言葉は一切耳に入って来ず、

（課長に悪い印象を持たれてしまった――）

という焦りと不安が頭の中を駆け巡り続けた。

――こうして、新たな上司との関係に早くも暗雲が垂れ込めたのだが、実際に僕を待っていたのは暗雲という表現では生易しすぎる、どす黒い雨雲だった。

課長は、相手によってかなり態度を変えるタイプの人だった。

彼の上司である部長やお気に入りの社員には柔和に受け答えをするが、そうではない社員には冷たく接し、その中で最も風当たりが強くなったのが、僕だった。

他の社員が名前で呼ばれる中、僕は「君」とか「おい」という風に声をかけられ、他の作業がどれだけうまくいっていても小さなミスが一つあると延々と怒られ、反省文を書かされることもしばしばだった。

また、課長は思いつきでものを言う性格で、ある日突然、

「最近読んだビジネス誌に書いてあったんだけど、小説家のヘミングウェイは立ったまま文章を書いていたらしいね。人間は立って作業をした方が脳が活性化されてパフォーマンスが高まるんだ」

と言い出し、僕だけ一日中立ったまま電話をかけさせられたり、パソコンの作業をさせられたりしたこともあった。

こういった課長の振る舞いはすごく理不尽に感じられたけれど、

（課長の期待に応えられない僕の責任でもあるんだ……）

と自分に言い聞かせ、最初の悪印象をなんとか覆そうとできる限りの努力を試みた。課長の言葉を理解するために『ビジネスカタカナ語辞典』を暗記し、食事やトイレはなるべく早く済ませ、仕事に取り組む時間を増やした。

その結果、今から二週間ほど前――。

課長が朝礼の席で、みんなに向かってこう言った。

「この部署で、一人だけ遅くまで会社に残って作業をしている人がいる」

――この言葉を聞いたとき、すぐに自分のことだと分かった。

僕は同僚からの頼みを断るのが苦手で仕事を抱え込んでしまい、残業に追われる

ことが多かった。

ついに努力が認められ、労(ねぎら)いの言葉をかけられるのを期待していると、課長は言った。

「『最も重要な決定とは、何をするかではなく、何をしないかを決めることだ』――スティーブ・ジョブズの言葉だよ」

何が起きたのか分からずきょとんとする僕を指差して、課長は続けた。

「君は、仕事のプライオリティがまったく分かっていない。だから他の社員が就業時間内で終わらせられる仕事を、延々と続けているんだ」

僕は助けを求めるように他の同僚たちを見たが、彼らは顔をうつむけたままだった。みんな、課長から目を付けられて僕のようになるのを恐れているのかもしれない。

「会社員は、自分の給料の3倍のプロフィットを出す必要があると言われている。君の残業代の3倍の売り上げを計算すると……」

課長がスマホの計算機アプリをタップするのを見て頭の奥が痛み出した。胃がせり上がるような感覚になり、吐き気をもよおしてくる。それでも僕は、課長に向かって「すみません」と頭を下げ続けた。

――この日を境に、朝、目を覚ますと体がベッドに貼りついているかのように重くて、起き上がるのに苦労するようになった。

会社に向かう満員電車の中では動悸が激しくなり、会社のビルが視界に入ると、腕や背中に蕁麻疹が出てくる。課長に呼びつけられると、皮膚の表面がぴりぴりと痛み出し、頭がくらくらするので話を集中して聞くことができなくなった。すると指示を聞き逃し、さらに怒られるという悪循環に陥っていった。

部長に相談して異動を願い出ることも考えた。

（でも、今の部署でこんなに評価が低い自分が、異動したところで何が変わるのだろう。しかも課長を飛び越して部長に不満を伝えたことが知られたら、どんなひどい扱いが待っているのか分からないぞ……）

次から次へと浮かんでくる不安を前に、行動を起こすことができなかった。

そんな八方塞がりの状況の中、大学時代の知人がフェイスブックに投稿したある記事が目に留まった。

「転職活動は、会社に勤めながらよりも、辞めてからした方が良い場合がある」

彼の記事によると、会社に勤めながらの転職活動には、突然の面接に対応できなかったり、どんな職種を選んだ方が良いかを落ち着いて考えられなかったりするデ

メリットがあるらしい。会社の仕事をこなすどころか、会社にたどり着くのが精いっぱいの僕にとって、次の職場を探す前に会社を辞める方が正しい選択に思えた。

（よし、言うぞ）

椅子から立ち上がった僕は、がくがくと震える足を、一歩、また一歩と前に進めていく。

（なぁに、簡単なことじゃないか。課長に「ちょっとよろしいですか」と声をかけ、会議室に来てもらい「会社を辞めたいです」と伝える。それだけだ）

心の中で繰り返し唱えながら進んで行った僕は、ついに、課長のデスクの前に立った。

そして覚悟を決め、課長に向かって口を開いた。

「あ、あの……」

「何？」

顔を上げた課長は、相手が僕だと分かると、あからさまな嫌悪感をにじませた。

そんな課長に向かって、僕は告げた。

「コーヒー買いに行きますけど、何か買ってきましょうか？」

＊

（ああ、僕はなんて情けない男なんだ……）

オフィスを出た廊下の端にある自動販売機の前の椅子に腰を下ろし、両手で頭を抱えた。

課長の顔を前にした瞬間、言おうと決めていたのとまったく違う言葉が口をついて出てしまった。

――いや、本当はそうじゃない。

（「会社を辞める」と言うんだ）と自分に言い聞かせていたときから、心の奥には猛烈な不安が渦巻いていた。

会社を辞めてしまって、僕は生きていけるのだろうか？

次の仕事は本当に見つかるのか？「どうして前の会社を辞めたんですか？」と聞かれてこの状況を話したら、僕を雇いたいと思ってくれるような会社はあるのだろうか？

もし転職できたとしても、これまで培ったスキルや肩書を捨てることになるかもしれない。給料が低くなり、生活水準が下がることに僕は耐えられるのだろうか？

両親にはどう報告すればいいんだ？

この会社に内定したときは二人ともすごく喜んでくれた。たまに帰る実家でも、必ず会社のことを聞かれる。「うまくいってるよ」と答えてその場を取り繕うと、両親はうれしそうに「会社の広告を見た」などと言ってウチの会社を持ち上げてくれる。そんな両親に対して「会社を辞めた」と報告したら、どんな風に取り乱すのか想像もつかない。

そして、何よりも――。

新卒で入ったこの会社以外の職場を知らない僕にとって、「会社を辞める」ことは、真っ暗闇の谷底に命綱なしで身を投げるような行為であり、どうしようもなく、怖かった。

（こんなに悩むくらいなら、会社を辞めるなんて考えない方が良いのかもしれない――）

そう思い直そうとしたが、一方で、僕の心を覆っている雨雲はさらに色濃くなっていく。

果たして僕は、この状況にどこまで耐えられるのだろう。

「このまま耐えていれば、何かが変わるかもしれない」――そんな希望を頼りに会社生活を続けてきたが、状況が変化する前に僕の心と体が壊れてしまうんじゃないだろうか。

結局、結論を出せない僕に次の行動を取らせたのは、頭に浮かんだこの言葉だった。

（課長にコーヒーを買いに行くって言ったんだから、すぐに届けないとサボってると思われるぞ！）

この期に及んで課長の顔色を気にしてしまう自分のことがまた少し嫌いになりつつも、椅子から立ち上がってコーヒーを買い、オフィスに戻ろうとした、そのときだった。

「自分、そっち行ったら、死ぬで」

え――。

振り向くと、立っていたのはビルの清掃のおじさんだった。

（いつの間に……）

考え事をしていたから気づかなかったのだろうか。突然、姿を現したように見えたおじさんは言った。

「いきなり話しかけてすまんな。ただ、こういうビルの掃除してるとよう分かんねん。入社してきたときはみんなほんまに活き活きとした顔してるんやけどな。三か月経ち、一年経ち、三年経つと……ほとんどの人が、心が死んでもうた顔になってまうんや」

そしておじさんは、手に持ったモップで僕を指して言った。

「ちょうど、今の自分みたいにな」

「えっ……」

自分の顔がどう映っているのか急に不安になったが、おじさんは優しい口調で続けた。

「自分、何か悩みごと抱えてるんちゃうか？　ワシで良かったら相談に乗るで」

見ず知らずのおじさんにこんな話をしていいのか迷ったけれど、軽妙な関西弁で話すおじさんに親しみやすさを覚えた僕は、

「実は……」

と話し始めてしまっていた。
すると、ポケットからタバコの箱を取り出したおじさんは、
「ここやったら吸われへんな」
と言って続けた。
「場所、変えよか」

*

非常口の階段を上り、扉を開けて屋上に出ると、差し込んできた強い日差しに目を細めた。
風は少し冷たく感じられたが、見上げると真っ白な雲が遠くに浮かんでいて、美しい青空が広がっていた。
（このビルに、こんな場所があったんだ）
毎日のように通っていた場所のすぐそばに隠れていた素晴らしい景色に感動していると、隣でライターにボッと火がつく音が聞こえた。
おじさんは、空に向かってタバコの煙を気持ち良さそうに吐き出しながら言った。

「何があったんや？」
おじさんの温かい雰囲気に後押しされた僕は、この三か月で起きたことについて語り始めた。
最初は言葉を選びながら、たどたどしい口調で話していたが、途中からは溜まっていたものがあふれ出るように勢い良く続けていった。
ときおり相槌（あいづち）を打ちながら真剣な表情で耳を傾（かたむ）けてくれていたおじさんは、僕の話が終わると携帯灰皿にタバコを入れ、こちらに顔を向けて言った。
「自分、これまでの人生で、一度もレールから外れたことがないやろ？」
「は、はい」
僕がうなずくと、おじさんは歩き出した。僕もあとをついていく。
フェンス際までやってきたおじさんは、眼下に広がる街を見渡した。大量に並び立つビルは、生い茂る植物のようにも見える。
おじさんは言った。
「周りがするから受験して、周りがするから就職して、周りと一緒に行動してたら不安にならんと済むからそうしてきたんやな。でも自分は、そないして得られる安心感と引き換えに――」

おじさんは、手に持ったモップの柄でコンクリートの床をコンコンと叩いて言った。

「囚人になってもうたんや」

「しゅ、囚人？」

思いがけない言葉に驚くと、おじさんはこちらに向かって手を差し出した。

最初は何の動作か分からなかったが、どうやらコーヒーを要求しているようだ。

迷いながらも自分用に買ったものを差し出すと、おじさんは「おおきに」と受け取り、課長のために買ったコーヒーを僕に飲むよう、うながしてから言った。

「もし、自分がこれまでに仕事選びで色んな失敗をしてきたんやったら、職場を変えることを恐れすぎることはあれへんかった。もし、過去に貧乏生活をしたことがあるんやったら、一時的に収入がなくなることに怯えすぎることもあれへんかった。でも、自分はそういう経験をしてこうへんかったんやな」

僕がおずおずとうなずくのを見て、おじさんは続けた。

「人間ちゅうのはな、経験してへんことにはどこまでも不安を広げてまうもんやねん。そんで、不安が大きゅうなればなるほど、ますます行動できへんようになる。その結果、世の中のほとんどの人が、『不安で作られた鉄格子』に囲まれたまま一

生を過ごしていくことになるんやで。いや……」
おじさんは、ゆっくりと首を横に振って言った。
「過ごしていけるんやったらまだマシや」
「……どういう意味ですか？」
僕が眉をひそめると、新たなタバコに火をつけたおじさんは、
「ちょうど、去年の今ごろやなぁ」
と遠い目をして言った。
「そんときは違うビルの清掃しててんけど、自分みたいな子と知り合うて、顔合わせるたびに話すようになってん」
おじさんはタバコを強く吸い込むと、ひときわ長い煙を吐き出してから続けた。
「その子も職場が合うてへんみたいやったからな。色々相談乗ってるうちに『違う仕事を探してみます』て言い出してな。『おじさんと会えなくなるのは寂しいから同じビルの中で転職しようかな』なんて冗談も言うとったんや。ただその子は、急に仕事が忙しなってもうたみたいでな……」
おじさんは寂しそうに続けた。
「人間、環境を変えるのは体力がいんねん。せやから疲れてくると、そこから抜け

出すことすら考えられへんようになんねんな。ワシはその子を見かけるたびに声かけるようにしてたんやけど、途中からは反応も無くなってもうて……」

僕は唾をゴクリと飲み込んでたずねた。

「その方は、どうなったんですか……」

するとおじさんは何も言わず、フェンスの外を見下ろした。

「ま、まさか……」

おじさんは無言でうなずき、しばらくしてから言った。

「ワシ、さっき自分に声かけたとき『そっち行ったら、死ぬで』言うたやろ？　あれ、心の話だけちゃうねん。鉄格子に囲まれてどっからも出られへんようになってもうた人間は、自分自身を消すちゅう最後の出口に向かってまうこともあんねんで」

僕は、フェンスに顔を近づけ、おそるおそる足元をのぞき込んだ。

道行く人がミニチュアの人形のように小さく見える。ここからあの場所まで落ちていくのを想像すると、足ががくがくと震え出した。

おじさんは静かな口調で続けた。

「ワシと違て自分みたいな会社勤めのエリートは、幼いころに親から『勉強しろ』

言われて、成績が悪いと『なんでもっと頑張らないんだ』て怒られたやろ。そんで社会人になったら上司から『仕事しろ』言われて、成績が悪いと『なんでもっと働かないんだ』て怒られる。自分はそうやって、怒られて、怒られて、今日まで生きてきたんやな」

僕がうなずくと、おじさんは続けた。

「でもな、人が生きる上で一番大事にせなあかんのは、勉強することでも、仕事することでもないねん」

そしておじさんは、僕の目をまっすぐ見て言った。

「人が生きる上で一番大事なことはな、本当につらいときに『助けて』と口に出して言えることやねんで」

太陽がちょうどおじさんの背後に隠れ、おじさんの背中から後光が差しているように見えた。

涙ぐむ僕に向かって、おじさんは続けた。

「人間ちゅうのはな、どれだけしんどいことが重なっても、ぎりぎりまで追い込まれても、なかなか人に助けを求められへんねん。人に弱みを見せたないし、『あいつは落ちこぼれだ』て思われたないからな。でも……」

おじさんは、優しく微笑(ほほえ)んで言った。
「笑われたってええやんか。無様(ぶざま)な格好さらしてもええやんか。ビルの上から放り投げてええのは、自分の体やのうて、プライドや」
おじさんは、僕の肩にそっと手を置いて言った。
「ワシは、今くらいの時間はたいがいこのビルにおるし、ワシやのうても、友人や会社の同僚、上司でもええ。自分は上司に、『会社を辞める』て言おう思てたみたいやけど、その前にせなあかんのは、相談や。自分にとって上司ちゅうのは、評価を下すだけの厳しい人に映ってるみたいやけど、人って意外と温かいもんやで。思い切って自分をさらけ出して助け求めたら、親身になって考えてくれるかも分からん。場合によっては、部署を異動するとか、会社を移ることになるかもしれへんけど、今より自分に合うてる場所が必ず見つかるはずやで」
「あ、ありがとうございます」
僕はおじさんの手を両手で握って言った。
「このお礼は必ず……」
するとおじさんは、飲み干したコーヒーの缶を振りながら言った。
「これもろたから充分(じゅうぶん)や」

そしておじさんは出入り口に向かって歩き出したが途中で立ち止まり、振り向いた。
「自分がワシにできる一番の礼はな……」
おじさんはモップを高々と持ち上げると、屋上から見えるたくさんのビルを指して言った。
「自分がどのビルで働いとったとしても、自動販売機の前で、活き活きとした顔でおることやで」

＊

「で、何?」
課長は、会議室の椅子に座るなりそっけない口調で言った。前もって予定を入れずに面談を申し込んだことにいら立っているのだろう。
どうやって切り出せば良いのか分からず、会議室は気まずい沈黙に包まれた。課長の指が机の上で小刻みに上下するのを見てさらに不安が高まったが、
「生きる上で一番大事なことはな、本当につらいときに『助けて』と口に出して言

えることやねんで」

という清掃のおじさんの言葉を思い出し、覚悟を決めて口を開いた。

「朝起きると体が重くて……仕事に集中できないんです」

課長とのコミュニケーションが原因であることを伝えるタイミングをうかがいながら、まずは今の自分の状態を話し始めた。

すると課長は、話の途中でぶっきらぼうに言った。

「メンタルクリニックは行ったか？」

「いえ……」

僕が力なく首を振ると、課長は表情を歪ませて言った。

「どうして行かないんだ？」

「それは……」

心療内科に行くことを考えたこともあったけれど、どうしても扉を開く気になれなかった。心療内科に通っているのを同僚に知られて、白い目で見られるのが怖かったのだ。

「すみません」

僕が頭を下げると、課長は言った。

「俺、うつになるやつ、許せないんだよ」
言葉の意味が分からず沈黙していると、課長はスマホをいじりながら続けた。
「まず、何よりも責任感が足りないよな。少し想像すれば、自分がうつになったとき穴埋めするのは周りの社員だってことくらい分かるだろ。うつに限らず健康状態に気を配るのは、ビジネスマンとしてのデフォルトだぞ」
課長は僕の沈黙に対して、言葉が理解できていないと判断したようで、
「デフォルトっていうのは『初期設定』のことな」
と付け加えて続けた。
「『働く者の責任とは、成果をあげることだけではない。成果をあげる上で必要なことのすべてを行い、それらの成果にも全力を傾けることである』――ピーター・ドラッカーの言葉だよ」
そして、課長は、「どうせインフルエンザの予防接種も打ってないんだろ？」と話を続けたが、僕は、「すみません……」と謝りながら涙をこぼしてしまった。
今、自分は、苦しんでいる――そのことを伝えただけなのに、どうしてこんな風に言われなければならないんだろう。
でも、何より悲しかったのは、こんな状況に追い込まれても思ったことを口に出

せず、ただただ、「すみません」と頭を下げ続けることしかできない、自分だった。
「ちょっとちょっと……」
僕の様子を見て焦った課長は、小さくため息をついて言った。
「勘弁してよ。これでパワハラとか言われたら、たまったもんじゃないからな」
「いえ……そういうわけでは」
僕は首を横に振って否定したが、課長は眉をひそめて言った。
「もしかして、この会話、レコードしてないよな？」
（レコードって録音のことだよな……）
課長の言葉に耳を疑ったが、課長はうわずった声で続けた。
「これ一応、アドバイスしとくけど、会社と揉め事起こすと次の就職が厳しくなるぞ。最近は、人事がＡＩを導入しているからネット上の情報でプロファイリングして……」
――課長の言葉を聞いていると頭の奥が猛烈に痛み出し、その痛みは首筋を通って全身に広がっていった。
まだ口には出せていないけれど、いざとなったら会社を辞めて転職すれば良い――その非常口の扉にも、重い錠が下ろされた気がしたからだ。

会議室の四方の壁が、ズズッ……ズズッ……と音を立ててこちらに向かってくる。清掃のおじさんの言葉が頭の中でこだました。

「鉄格子に囲まれてどっからも出られへんようになってもうた人間は、自分自身を消すちゅう最後の出口に向かってまうこともあんねんで」

会社という牢獄に囚われた僕は、一生外に出ることはできない。そして出口を完全に塞がれた僕は、おじさんが話していた人と同じ運命をたど――。

ドン！

突然、会議室の扉が音を立て、ものすごい勢いで開いた。

振り向くと、扉の前にいたのは清掃のおじさんだった。

（ど、どうしてここに――）

衝撃で固まる僕をよそに、おじさんはつかつかと歩み寄ってきて隣に立つと、手に持っていたモップを持ち上げ、いきなり課長の胸元を突いた。

椅子から転げ落ちた課長は、

「な、何をするんだ！」

と聞いたことのないすっとんきょうな声を出したが、おじさんは冷静な口調で返した。

「掃除や」

そしておじさんは、土足のまま机の上に登ると腰を落とし、床に尻もちをついている課長を見下ろして言った。

「部下がこない苦しんでんのに、その苦しみに寄り添おうとせず、自分の立場を守るためだけの正論もどきを吐き続ける――」

立ち上がったおじさんは、モップを高々と振り上げて言った。

「そんなお前の汚れ切った心を、掃除しに来たんじゃぁ！」

そして、おじさんは机から飛び降り、課長の顔面めがけてモップを振り下ろした。

「ひゃぁ！」

悲鳴を上げながらなんとかかわした課長は、机の上の受話器を手に取って言った。

「け、警備員……！」

しかし、受話器はすぐに課長の手から離れ落ち、ぶらぶらと垂れ下がることになった。

（そ、そんな……）

――このとき見た光景を、僕は一生忘れられないだろう。

こんな話をしたところで誰からも信じてもらえないだろうけれど、目に映った光景をそのまま言うと――清掃のおじさんの鼻が長く伸びて課長に巻き付き、体を宙に持ち上げたのだ。

なんと、おじさんは、ゾウの姿になっていた。

（ぼ、僕は、夢でも見ているのか――）

衝撃のあまり呆然とする僕の前で、ゾウに変身したおじさんは目をくわっと見開いて啖呵を切った。

「ええか？　よう覚えときや。これがほんまのパワハラじゃあ！」

そしておじさんは、「社員の幸せあっての会社やろが！」「自分、横文字が好きなんやったらサステイナブル（持続可能性）についてもっと勉強せんかい！」「だいたい自分みたいなもんが渋沢栄一くん語るなや！　孔子くんの影響受けとった渋沢くんは、『企業経営はお金を稼げば良いのではなく、〝公益性〟と〝道徳〟が重要だ』言うて、早うから社会福祉事業に貢献してたんやで！」と叫びながら鼻をぶん回して課長の体を何度も壁に叩きつけた。

頭に大きなたんこぶを作り、ぐったりとした課長を持ち上げると、おじさんは僕をアゴでしゃくって言った。

「ほら、自分も何か言うたれや」

――このとき僕の頭には、これまで課長から浴びせられた数々の悪言が思い浮かんだけれど、清々しい口調で一言だけ言った。

「本日をもって、会社を辞めさせていただきます」

*

「すみません、こんなに狭くて汚いところに神様をお招きすることになってしまって……」

自宅のマンションの扉を開けながら恐縮して言うと、ガネーシャは部屋に入るなり本来のゾウの姿に戻り、

「何言うてんねん」

と大げさに手を振って続けた。

「今や世界を代表するＩＴ企業のグーグルやアップル、アマゾンは自宅の狭いガレージから始まったんやで。小説家のスティーヴン・キングくんなんて、売れる前はトレーラーハウスの洗濯室で執筆してたし、ノーベル平和賞を受賞したシュバイツァーくんが最初に開いた診療所は鳥小屋やったからな」

そしてガネーシャは、四つあるうちの一つの手で僕の肩を抱き寄せ、他の手の人差し指で床を指して言った。

「伝説ちゅうのはな、こういう小汚い部屋から始まるのが相場やねんで」
「あ、ありがとうございます」
そう言いながら頭を下げた僕は、
（これから僕を待ち受けているのは、一体、どんな未来なんだろう……）
ただただ、「素晴らしい」ということだけが分かっている今後の人生に胸を躍らせた。
靴を乱暴に脱ぎ捨てて部屋に上がったガネーシャは、つかつかと進むと無造作にソファに腰かけた。それから胡坐をかき、上側の右の手のひらを正面に、左の手のひらを天井に向け、表情と体を石像のように固めた。
（ああっ……！）
それは「ガネーシャ」で画像検索したら必ず表示される、ガネーシャ神のポーズだった。あわてて丸テーブルをガネーシャの前に持っていった僕は、帰る途中にコンビニで買ったビール、日本酒、スルメ、サラミ、チョコレート、ポテトチップス、柿の種などを並べていった。
そして正面に座り両手を合わせると、深々と頭を下げて言った。
「ガネーシャ様、どうぞお納めください」

すると、しばらくの間そのポーズで固まっていたガネーシャは、ニカッと歯を見せて笑った。
「冗談やがな」
そしてソファから降りると、おどけた様子で僕の肩を叩いて言った。
「信者がぎょうさんおって捌(さば)ききれんときは今のポージングで対応してるんやけど、自分とワシみたいにマンツーマン、いや、ゴッドツーマンになったときはフレンドリーな感じでやってんねんで」
そしてガネーシャはテーブルの上にある缶ビールを二つ手に取ると、一つを僕の前に置いて言った。
「ほな、まずは乾杯といこうやないか」
僕がうながされるままに缶のタブを開けると、ガネーシャは缶を持ち上げて言った。
「神様との出会いに！」
「か、神様との出会いに！」
ガネーシャと缶を合わせた僕は、そのまま口に運んだ。お酒が体の隅々(すみずみ)まで染み渡っていくのを感じる。

（ああ、なんて美味しいんだ……）

それは、間違いなく、これまでの人生で飲んだ中で一番美味しいお酒だった。

もう、明日からは会社に行かなくていい。朝は何時まで寝てようが構わないし、会社からのメールや電話に怯えることもない。

しかも、そんな素晴らしい状況に加えて――。

僕は、目の前にいるガネーシャに視線を向けた。

ガネーシャ神。

僕は神様に詳しいわけではないけれど、昔プレイしていたゲームに登場するキャラクターがガネーシャをモチーフにしていたので、興味を持って調べたことがあったのだ。

ガネーシャは、インドで知らない人はいない有名な神様で、金運、仕事運、恋愛運、健康運……ありとあらゆるご利益（りやく）があるが、その中でも特に重要なのは「障害を取り除く神」だということだ（僕にとっての障害は、言うまでもなく課長だろう）。

まさか実物を目にする日が来るとは思ってもみなかったけれど、絶望の淵（ふち）から僕を救い出してくれた神様の存在を受け入れない理由など、どこにもなかった。

むしろ不安だったのは、僕のような人間に、こんな素晴らしい出来事が起きてい

いのだろうか、あとから埋め合わせで、とんでもない災難に見舞われるんじゃないか、ということだ。

お酒が入ったこともあり、僕はそのあたりの話に触れてみることにした。

「ガ、ガネーシャ様」

「何や？」

すでに頬を赤らめているガネーシャに向かって、僕は緊張しながら続けた。

「ガネーシャ様は、どうして私のような者のもとに降臨していただけたのでしょうか」

するとガネーシャは、

「私のような者、か」

とつぶやくと、手に持ったビールの缶を見つめて言った。

「まあ確かに、ワシは神様界において、可愛さ、カッコ良さ、面白さ、頭の良さ、教えの深さ、あとは……可愛さな。ま、ありとあらゆる点において完璧で、『ガネーシャって、欠点がないところが欠点だよね』てまことしやかにささやかれるほどの完全無欠のパーフェクト・ゴッド、略してパゴや。そんな、パゴり散らかしてるワシが、自分みたいな、レールの上を進むだけしか能があらへん『トロッ子』のも

とに降臨するちゅうのは、アガサ・クリスティちゃんも裸足で逃げ出すミステリーでしかないやろな」

「……」

――ガネーシャと普通に会話をするようになってからかなり口が悪いことに気づいたが、会社のストレスに比べたら、全然、許容範囲内だ。

「ワシが、自分みたいなもんのとこに降臨した理由はな……」

ガネーシャはそう言いながらポテトチップスの袋をこちらによこしたので、僕に食べるよう勧めてくれたのかと思ったが、一応、封を開けて返したところ満足そうに受け取ったので、単に開封の作業をさせられただけだと分かった。

ガネーシャは、ポテトチップスを豪快にほおばりながら言った。

「ワシ、どこまで話したっけ?」

僕は、ガネーシャには人間界に降臨して人を成功に導く趣味があること、そして教えを受けたほとんどすべての人が、人類史に名を残す偉人になっているという話を聞いたことを伝えた。するとガネーシャは、

「せやねん、せやねん」

と指についたポテトチップスの塩を舐めながら周囲を見回し、唾液でべとべとに

なった人差し指を天井の蛍光灯に向けて言った。
「たとえばエジソンくんが発明した『白熱電球』な。ま、実際に発明したんはジョセフ・スワンくんでエジソンくんは電球を長持ちさせる材料が『竹』ちゅうことを見つけただけなんやけど……まあ細かい話はどうでもええねん。世の中的にエジソンくんは、『竹の扇子』を見て『竹』が材料やて閃いたちゅうことになっとるんやけどな。あれ実は、六〇〇〇種類試しても見つけられへんエジソンくんにしびれを切らしたワシが、『自分、どんだけ実験のセンスないねん！』て、竹の扇子でほっぺをひっぱたいたんがきっかけやねんで」
　そしてガネーシャは、
「ワシの笑いのセンスはありすぎやで」
　と肩を揺らして笑い、ちらりとこちらに視線を向けたが、僕は驚いた表情で言った。
「つ、つまり、ガネーシャ様は最初から白熱電球を長持ちさせる材料が『竹』だと分かってて……」
　するとガネーシャは、少し物足りなさそうに、
「まあ、この場合は笑いよりもそっちの方に食いついてまうか」

とつぶやくと、タバコの煙をこれみよがしに吐き出して言った。
「ワシを誰や思てんねん。ガネーシャやで。神様なんやで」
「す、すごい……！」
僕が衝撃で目を丸くしていると、ガネーシャは鼻孔をふくらませ、さらに得意気な口調で語り出した。
「ま、自分みたいな凡夫でもベートーヴェンくんが作曲した『運命』くらいは知ってるやろ？」
「もちろんです。歴史に残る名曲ですよね」
「あの曲の最初のジャ・ジャ・ジャ・ジャーンな。あれ、ワシの鼻歌から取ってんで」
「ええっ⁉　そうなんですか⁉」
「せやねん。あれ、元々、フ・フ・フ・フーンやってん」
「す、すごすぎます……」
衝撃の事実に呆然とするしかなかったが、ガネーシャは、
「この程度で驚いてどないすんねん」
と胸を大きく反らせて続けた。

「ナポレオンくんを『三時間睡眠』にさせたんもワシやし、

チャップリンくんに『チョビヒゲ』勧めたんもワシやし、

フレミングくんの右手と左手の法則なんて単なるワシの決めポーズやし、

アガサ・クリスティちゃんに『そして、誰もおらんようになったらええんちゃう？』てアドバイスしたんもワシやし、

日本で言うたら、聖徳太子くんに十人の話を同時に聞くコツ教えたんもワシやね。

（そ、そんな……）

衝撃に次ぐ衝撃に言葉を失う僕に向かって、ガネーシャは誇らしげに鼻を振りながら続けた。

「聖徳太子くんは九人まではいけたんやけど、十人の壁がどうしても超えられへんかってん。せやからワシがアドバイスしたったらすぐに十人いけるようになって。それ以降もどんどん記録を伸ばして最終的に二十八人までいけるようになってんけど、ワシの話まで他のやつと同時に聞くようになりよったから、『この特技、めち

ゃめちゃ腹立つからやめろや』言うて、公式記録も十人でストップすることにしてんで」

次々と繰り出される武勇伝にただただ驚愕していたが、気持ち良さそうに話していたガネーシャは、突然表情を変え、右手に持ったビールの缶をドン！　と床に叩きつけた。

「に、も、かかわらずや！　ワシがこない頑張って偉人育ててきたちゅうのに、神様界でこんなこと言い出すやつが出てきてん！　こんなことって、どんなことか分かるか⁉」

「わ、分かりません」

「せやろ！　この完璧極まりないワシに、『ミスター・パゴ』のワシにイチャモンつけられる余地なんてビタ一文あれへんからな！　せやのに、こう言われてん！『ガネーシャってさ、元々、才能や志がある人間に乗っかってるだけじゃね？』」

「ええっ……⁉」

「しかもそれに飽き足らず、『ゾウって乗り物として人間に乗られてるよね？』『ゾウって、人間を育てる側じゃなくて、育てられる側じゃね？』的なこと言うて、ゾウとしてのワシをよってたかってバカにしてきたんや！」

それからガネーシャは他の神様に悪態をつきながら何度も缶を床に叩きつけ、僕はそのたびに飛び散るビールをティッシュで拭き続けた。

ガネーシャは、ボコボコにへこんだ缶のビールを一気に飲み干し、大きなゲップをすると言った。

「せやからワシは、そいつらに言うたってん。『そこまで言うんやったら誰も文句つけられへんやつをゼロから偉人に育て上げたろやないかい！』てな。……ただ、この『ゼロから偉人に』ちゅうのが難しゅうてな。たとえば、生まれつき環境に恵まれてへんやつでも、その逆境をバネに成功してまうやつはおるし、『偉人は中産階級から生まれる』て言葉もあるように、一般家庭からすごいやつが生まれたりするもんやねん」

そしてガネーシャは、僕の全身をサッと値踏みするように見て続けた。

「まあ、そんな中でも、『平凡さ』は条件として外せんやろちゅうことになって。自分は育ちも見た目も平凡で、勤めてる会社は平均よりちょい上やけど、その会社でイケてへんから相殺されて……みたいな感じで絶妙な平凡さが醸成されててん。自分以外でも南半球の方にええ感じのやつがおってんけど、そいつは現実世界では平凡やったんやけど、オンラインゲームの世界で非凡やったんや。せやから、総合

平凡力で勝った平凡王の自分に白羽の矢が立ったちゅうわけや。他の神々も自分のこと推してたしな。せやから『ほな、こいつで決まりや！　あとからごちゃごちゃ言うんやないで！』言うてそのまま降臨して来たんやで」

（そ、そんな理由で――）

ガネーシャが降臨した理由が自分の平凡さにあったと知り少なからぬショックを受けたが、あとから何か埋め合わせが必要というわけではなさそうなのでホッと胸をなでおろして言った。

「ガネーシャ様、このたびは私のような者を選んでいただいてありがとうございました」

そして僕は両手を合わせ、深々と頭を下げた。

するとガネーシャは鋭い目つきになり、僕をじっと見つめて言った。

「これ、実はワシが自分に正体を明かしてからずっと感じてたことなんやけど……」

そして、ガネーシャは言った。

「自分、めっちゃええな」

突然の褒(ほ)め言葉に戸惑いながらも、
「み、身に余る光栄です」
と返すと、ガネーシャは、しみじみとした表情でタバコの煙を吐き出しながら言った。
「ワシがこれまでゴッドツーマンで人間育てたときな……まあこれはワシが誰に対してもフレンドリーに接してまう器の大きさが原因やとは思うんやけど……相手からナメられるちゅうかな。ぶっちゃけた話、両手合わせて拝(おが)まれたこととか、ほぼ、ないねん」
そしてガネーシャは煙に目を細めながら言った。
「教え子に殴られたこともあんねんで」
「そ、そんな……」
「あり得へんやろ？」
「あり得ないです、あり得ないです」
僕は首をぶんぶんと横に振りながら言った。
「人間が神様を殴るなんて、そんなことは、もう、絶対にあってはならないことで

す。神様はすべての人間が敬(うやま)わねばならない存在なのですから……」
気持ちを込めて話していたが、
（えっ……）
途中で思わず言葉を止めてしまった。
ガネーシャが、涙ぐんでいたのだ。
ガネーシャは、ずずっ、ずずっと、鼻をすすりながら言った。
「初めてかも」
「え？」
ガネーシャは、人差し指で自分と僕を交互に指しながら言った。
「ワシ、人間とこういう関係性築けたの、初めてかも」
ガネーシャはタバコを空き缶の上に置くと、ティッシュを手に取って鼻をチーン！　とかんだ。
「いや、ほんまに自分の言うとおりやねん。ほんまに自分の言うとおりやねん！　二回言うたけど三回目言うとくわ！　ほんまにっ、自分のっ、言うとおりやねんっっっ！！！　本来、神様と人間は明確な上下関係があってしかるべきちゅうか、こんなことわざわざ言わへんでもそうなるんが当然やねん！　せやけど、降臨する

先々の人間があまりにもワシのこと軽んじてきよるもんやから、『あれ？　神様と人間ってこんな感じやったっけ？』って逆にこっちの方が不安になってもうて、最近では、『時代なんかなぁ』てあきらめかけてたとこやったんや」

そして目を真っ赤にしたガネーシャは、僕に向かって何度も頭を下げながら言った。

「ワシを神様扱いしてくれて、ほんまおおきに、ほんまおおきに……」

そしてガネーシャは、一段と深く頭を下げて言った。

「ほんまおおきに、です」

僕はそんなガネーシャを見て（泣き上戸なのかも……）と思いつつも、真摯な口調で返した。

「ガネーシャ様のような慈悲深い神様に降臨してもらえて、これまで育てられてきた人たちは本当に幸運だったんですね」

するとガネーシャは、充血した目でじっと僕を見つめたあと、ふうぅぅ……と大きく息を吐き出して言った。

「ワシ、今回の降臨では、過去に育てた偉人の平均をはるかに上回る怪物を生み出すことになりそうやわ」

「か、怪物……」
言葉の響きに期待を通り越して不安すら感じたが、ガネーシャは首をコキコキと鳴らしながら言った。
「今から自分を、どれくらいの怪物に育て上げるかちゅうとやなぁ」
そしてガネーシャは、何かを思いついた様子でニヤリと笑うと、片方の眉を持ち上げて言った。
「たとえば、将来、地球上から人類がおらへんようになって、次の知的生命体が生まれたとするやん？」
――設定のスケールが大きすぎてどう返して良いのか分からなかったが、ガネーシャはどんどん話を進めていく。
「その知的生命体たちがな、今、ワシらがしてるみたいに酒盛りしながら、ふとこんな話を始めんねん。
『結局さぁ、人類で一番偉大だったやつって誰だと思う？』
するとな、その場におる連中は、やれアインシュタインや、エジソンや、ディズニーや、ガンジーや、言うてな。人類史に名を残した偉人たちを挙げていくんやけど、そん中で――」

ガネーシャは、人差し指で僕をビッと指して言った。
「自分の名前を言うやつがおんねん」
「ぼ、僕を……」
「そしたら、その場はどうなると思う？」
「ど、どうなるんですか？」
答えがまったく想像できずにたずねると、ガネーシャは言った。
「――爆笑すんねん」
「爆笑？」
首をかしげる僕に向かって、ガネーシャは口から泡を飛ばしながら続けた。
「みんな、爆笑しながらこう言うねん。『いやいや、その名前出していいなら、アインシュタインとか言わねえし！　人類で一番偉大なのは〝彼〟に決まってるんだから、今、話してるのは、当然、〝彼〟抜きでの話だろ？　その名前出して良いなら最初から言ってるわ！』。すると他のやつも、『俺だってそうだ！』『俺もだわ！』『〝彼〟のしたことに比べたら、他の偉人のしたことなんて小学生の自由研究以下っしょ！』
――こうしてこの話はお開きになり、『来月の冥王星ツアーだけど、ロケットの

席エコノミーでいい？』ちゅう話題に移っていくねんな」
　そしてガネーシャはゆっくりと立ち上がり、四本の人差し指を天井に向けたあと、僕に振り下ろして言った。
「ワシは今から自分をそんな偉人に――宇宙史に語り継がれるベスト・オブ・偉人に――育て上げることになるんやで！　そんで、その偉人を育てるんは誰や⁉　ワシや！　このガネーシャ様やぁ！！！」
　そしてガネーシャは、
「いよっ、ガネーシャ！　この偉人製造機！　人間育てさせたら宇宙一！」
　と言って、色々な動きをつけながら自分に合いの手を入れ始めた。
（僕は今後の人生で、一体、どれほどのことを成し遂げてしまうんだ――）
　話の壮大さについていけず、ただただ唖然とするしかなかったが、ガネーシャは、「いよっ、ガネーシャ！」「さすガネーシャ！」「ガネーシャ屋ァ！」と部屋じゅうを跳ね回り、さらには体を宙に浮かせて自分に合いの手を入れ続けた。
　それから突然動きを止めると、四本の腕を自分の体に打ちつけながら降りてきて言った。
「あかん、ワシの育成熱が最高潮に達してもうた。早速やけど、始めよか」

「よ、よろしくお願いします」
僕はあわてて姿勢を正して頭を下げると、ガネーシャは僕に向かって手を差し出し、指先をクイッ、クイッと動かして言った。
「ほんなら、まずは教えてもらおか」
「教える？」
僕は首をかしげてたずねた。
「私がガネーシャ様に教えることなんてあるのですか？」
するとガネーシャは、大きく一度うなずいてから言った。
「実はワシ、人の心を見通すことができんねん。まあ当然やわな。神様やし。そんで下界に降臨するときはたまにその力を使（つこ）てるんやけど、今回は、あえて封印してきてん。何でか分かるか？　これはな、ワシ自身への挑戦やねん。まっさらの状態から一介の凡人である自分を史上最高の偉人に育て上げることで、ワシの育成能力を完膚（かんぷ）なきまでに証明したいんや」
そしてガネーシャは、長い鼻を僕の肩にぽんと置いて続けた。
「安心せえ。確かに、自分は凡人や。箸（はし）にも棒にもかからへん、言うたら、ただの肉塊（にくかい）や。スーパーの半額シールが貼られたまま冷蔵庫の奥で忘れ去られて真っ黒に

なった肉塊、というより生ゴミや。この生ゴミ人間がぁ！　せ・や・け・ど、今、自分の目の前におるのは誰や？　そう、博識多才で眉目秀麗、古今無双のガネーシャ様や！　せやから何も怖れる必要はあらへん。自分の心の奥底にある本音を、そのままポンと口から出したらええ。そしたら、このガネーシャ様が天辺に導いたるからな」

そして、ガネーシャは僕に向かって差し出していた手を、さらに近づけて言った。

「さあ、教えてや。何やねんな、自分の『夢』は――」